Charles Camille Saint-Saëns

2.アルジェリア組曲 作品60（サン＝サーンス）

サン＝サーンス（Camille Saint-Saëns：1835 ～ 1921）は、パリで生まれた、フランスの作曲家、オルガニスト、ピアニストである。早くから音楽の才能を発揮し、13歳でパリ音楽院に入学してオルガンと作曲を学んだ。そののち、18歳でサン・メリー教会、22歳でマドレーヌ教会という、どちらも美味しそう・・・ではなく、権威のある教会のオルガン奏者に就任した。

サン＝サーンスは旅行好きとしても知られており、とりわけエジプトやアルジェリアなどがお気に入りの地域だったらしい。

サン＝サーンスがオルガン奏者を
務めていたマドレーヌ教会
彼の国葬もここで執り行われた

アルジェリアは、アフリカ大陸の北西部に位置し、その国土の大部分はサハラ砂漠となっている。そんなアルジェリアの気候風土からインスピレーションを得て作曲されたのが、この『アルジェリア組曲』である。ちなみに『大学祝典序曲』と同じく1880年に作曲された。なお、サンサーンスは、旅先のアルジェリアにおいて86歳で没した。

アルジェリアと旧宗主国フランスの地図

第１曲　前奏曲（アルジェの眺め：En vue d'Alger）

副題の「アルジェ」はアルジェリアの首都で、地中海に面している。

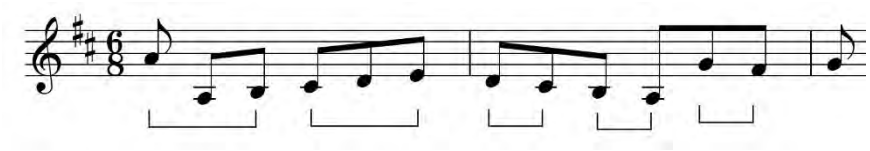
ティンパニの連打に導かれてチェロが、船に乗っていると感じることのできる「海のうねり」を表現する。中間部は、ヴァイオリンのトリルのような刻みに乗せてトランペットとホルンが高らかに歌う。これは船から眺めるアルジェの街の賑やかさを表現しているようだ。再び曲は海のうねりを表現し、やがて船はアルジェの港に到着する。

アルジェ市内中心部のパノラマ

第２曲　ムーア人の狂詩曲（Rhapsodie mauresque）

ムーア人とはアフリカ北西部の住人の呼称で、ヨーロッパの芸術作品には重要な存在である。シェイクスピアの戯曲『オセロ』の主人公オセロやモーツァルト作曲の歌劇『魔笛』のモノスタートスのほか、ストラヴィンスキー作曲のバレエ『ペトルーシュカ』やヴェルディ作曲の歌劇『アイーダ』にも登場する。

曲は３つの部分により構成されており、その第一部の主題は12拍で一つのフレーズ（リズム型式として12拍（６拍子の２小節分）を３拍＋３拍＋２拍＋２拍＋２拍に分けている）を形成していて、のちにフラメンコへと発展するムーア人の音楽が表現されているようである。



ヴァイオリンの刻みに続けてオーボエとヴィオラが奏でる第二部のスピード感のある旋律はいかにも異国情緒にあふれており、また、第三部のティンパニとタンバリンによるリズムも印象的である。

第３曲　夕暮れの夢―ブリダにて
（Rêverie du soir. À Blidah）

副題の「ブリダ」は、首都アルジェからは程遠くなく位置する都市で、美しい泉と果樹園のある保養地として繁栄したそうである。

フルートの優しいそよ風のような序奏に導かれてソロ・ヴィオラが夢見心地な美しい旋律を奏でる。

この順次進行（旋律の音のつながりが、音階上の隣の音へと繋げていく動き）を基本とする柔らかな旋律は、聴いている者を眠りに誘う。

アルジェリアの都市ブリダの中心地

第４曲　フランス軍隊行進曲（Marche militaire française）

この第４曲は特に有名であり、単独で、もしくは吹奏楽等に編曲されて演奏されることが多い。日本語版のオーケストラ・スコアでは、この第４曲のみが収録されている。題名からも当時のアルジェリアがフランス領であったことがうかがわれる。

この曲は２つの主題を中心に構成されている。第一主題は冒頭から弦楽器によって荘厳に演奏される。その後、木管楽器、トロンボーン等に展開されたのちトランペットらの高らかなファンファーレに導かれて第二主題が、これまた弦楽器に現れる。途中「あれっ?ロッシーニ?」みたいな和声進行や第二主題の展開ののち、第一主題が華やかに再現・展開される。